政大日本研究【第六號】
2009 年 4 月，頁 127~143

有關日語引用和變化表達句中動詞語法化現象之探討

蘇文郎*

摘要

本研究的目的在探討日語引用表達句動詞「言う/思う/する」和變化表達句動詞「なる」之語法化（grammaticalizaion）現象。主要針對由原具有實質語義的述語動詞用法轉化為具構句功能的複合辭、表情態的助動詞及專司連接名詞的連體修飾功能等現象、就其語法化過程所伴隨的實質語義喪失及文法機能獲得而產生的句法結構和語義變化加以剖析闡明。

主要的探討對象為

1 轉化為構句功能的複合辭用法

①提題助詞性用法　例：～といえば／～というと／～といったら～となると／～となれば／～とすれば

②接續助詞性用法　例：～とはいえ／～といって／～と思うと～と思ったら／～とすれば／～としたら／～としても／～となると／～となれば

③接續詞性用法　例：というと／と思うと／とすると／となると

2 連體修飾功能用法　例：～というN／～といったN～に／となるN

3 情態助動詞化用法　例：～という（傳聞）／～と思う（敘述態度）～とする（內容假定）／～に／となる（推論結果）／～に／となります（表對人態度／鄭重）

關鍵詞：語法化；引用句；變化表達句；語義情態化；形式動詞的用法提題助詞化；接續助詞化；接續詞化；連體修飾功能

* 國立政治大學日本語文學系 教授

引用動詞と変化動詞の文法化現象をめぐって
ー「言う」「思う」「する」「なる」を例としてー

蘇文郎*

要旨

本研究は主に引用表現と変化表現にもっとも頻繁に用いられる「言う」「思う」「する」「なる」という4つの動詞を例として取り上げ、それぞれの実質的な意味を持つ述語動詞としての用法から、テキスト的機能を帯びた複合辞化やムード助動詞的用法への転化などの諸現象を考察し、それぞれの動詞の文法化の過程における実質語的性質の喪失及び機能語的性質の獲得にかかわる統語的特徴と語彙的意味の変化を明らかにすることを目的とする。主な考察対象は次の3つのタイプのものである。

1）テキスト的機能を帯びた複合辞と化したもの

① 提題助詞的なもの

例：～といえば／～というと／～といたら/～となると
～となれば／～とすれば

② 接続助詞的なもの

例：～とはいえ／～といって／～と思うと～と思ったら
～とすれば／～としたら／～としても／～となると
～となれば

③ 接続詞的なもの

例：というと／と思うと／とすると／となると

2）連体修飾用法のもの

例：～というＮ／～といったＮ／～に／となるＮ

* 国立政治大学日本語文学科　教授

3）ムード助動詞化したもの

例：～という（伝聞）／～と思う（叙述態度）／～とする（内容仮定）～に／となる（推論結果）／～に／となります（対人的態度／丁寧さ）

キーワード：語法化、引用表現、變化表現、ムード助動詞化、形式動詞的用法、提題助詞化；接續助詞化、接續詞化、連體修飾機能

A Study of Grammaticalization with Quotational and Change-of-State Constructions in Japanese

Wen-lang Soo*

Abstract

The aim of this project attempts to analyze the mechanism concerning the grammaticalization in Japanese quotational and change-of-state sentences. In this study ，I focus on the change in function and meaning of the constructions which contain the quotational verb and change-of-state verb, and examine how the meaning is extended from the basic meaning to the modalitical meaning. Special attention will he made on the continuum between content words and function words. The main points discussed include

1 Textural Function：

① Topical meaning ：～toieba／～toiuto／～toittara／～tosureba～tonaruto／～tonareba／～tosureba

② Conjuntive usage ：～towaie／～toitte
～toomouto／～toomottara/～toomoeba
～tosureba／～toshitara／～toshitemo
～tonaruto／～tonareba

③ Connective usage ： toiuto／toomouto／tosuruto／tonaruto

2 Noun modification ：～toiu N／～toitta N／～ni／tonaru N

3 Modalitical meaning ：～toiu／～toomou／～tosuru／～ni／tonaru～ni／tonarimasu

Key word: Grammaticalization; Quotational expression; Change-of-state expression; modalitical meaning; Topical meaning, Conjuntive usage, Connective usage

* Professor of Department of Japanese, National Cheng-Chi University

引用動詞と変化動詞の文法化現象をめぐって
－「言う」「思う」「する」「なる」を例として－

蘇文郎

1、はじめに

1.1　目的

筆者の過去における一連の考察を通じて、引用や変化を表す日本語の諸種の意味と形式には、中心に基層をなす部分があると同時に、その周辺に個別的含意がさまざまな広がりを見せていることが明らかになった。特に内容語（content word）としての引用動詞や変化動詞が機能語（functional word/ grammatical word）としての性格を持つものに変化する現象、いわゆる文法化（grammaticalization）現象が随所観察される。

本研究は主に引用表現と変化表現にもっとも頻繁に用いられる「言う」「思う」「する」「なる」[1]という 4 つの動詞を例として取り上げ、それぞれの実質的な意味を持つ述語動詞としての用法から、テキスト的機能を帯びた複合辞化やムード助動詞的用法への転化などの諸現象を考察し、それぞれの動詞の文法化の過程における実質語的性質の喪失及び機能語的性質の獲得にかかわる統語的特徴と語彙的意味の変化を明らかにすることを目的とする。

1.2　文法化とは

文法化とは何か、概ね以下のように定義できる。

内容語だったものが機能語としての性格を持つものに変化する現象[2]

[1] 「する」「なる」は語彙的意味を持たず、もっぱら統語的機能を表す形式動詞とされることが多い、例えば村木（1991）である。本研究では内容と格や結果語「に／と」格がとれる「する」と「なる」を引用動詞と変化動詞として扱うことにする。
[2]三宅（2005）を参照。

文法化というその概念と用語は、一般言語学から来たものと思われているようであるが、日本語の研究においてもかつて、三上（1972：194）が「或る単語が慣用の結果、一方的な用法に固定して原義からもそれ、時には品詞くずれも引き起こすというような場合にその単語は形式化したという」と述べ、文法化に通じる概念を提出している。三上のいう「品詞くずれ」は文法化のプロセスで生じるとされる「脱範疇化（decategorization）」という概念と同義であり、両者の概念の間には共通性も多いと考えられる。文法化は日本語の引用構文や変化構文に即して言えば、もともと内容語として使われる引用動詞や変化動詞が助詞や助動詞のような機能を有するようになる現象と言い換えることができる。

このように、文法化とは内容語と機能語の区分を前提として定義される現象ということになるが文法化に関する研究は結果として両者の連続性を捉えることになろう。

そして、文法化は典型的には「漂白化（bleaching）」とも呼ばれる実質的意味が抽象化、希薄化あるいは消失するという意味的な変化の側面、及び「脱範疇化（decategorization）」と呼ばれる、語としての自立性が失われ、専ら文法機能を担う要素になる、という形態的、統語的な側面を合わせ持っている。

この文法化における二つの側面に関して、問題となり得る「言う」「思う」「する」「なる」が含まれる表現の類型は大きく 1）テキスト的機能を帯びた複合辞と化したもの、2）連体修飾用法のもの、3）ムード助動詞と化したもの、の 3 つに分けられる。

1）　テキスト的機能を帯びた複合辞と化したもの

（テキスト的機能）

①提題助詞的なもの、例：
～といえば／～というと／
～といったら／～とすれば
～となると／～となれば
～とすれば

②接続助詞的なもの、例：
～とはいえ／～といって
～と思うと／～と思ったら
～とすれば／～としたら　など
～となると／～となれば

③接続詞的なもの、　例：
というと、
と思うと、
とすると、
となると、

2）　連体修飾用法のもの、　例：
（つなぎ的な機能）
～というN／～といったN
～に/となるN

3）　ムード助動詞化したもの、例：
（表現的機能）
～という（伝聞）
～と思う（叙述態度）
～とする（内容仮定）
～に/となる（推論結果）
～に/となります（丁寧さを表す／対人的態度）

2.　考察：複合辞化に見られる「言う」「思う」「する」「なる」の文法化諸相

この節では前節で述べたような視点に立って各現象ごとに問題点を整理し、考察していくことにする。

引用動詞や変化動詞の複合辞化現象は複合辞のタイプに対応して提題助詞化、接続助詞化、接続詞化の 3 つのタイプが考えられるが、以下、順を追ってそれぞれの特徴を見ていくことにしたい。

2.1　提題助詞化のもの

（1）用法例：A：～といえば／～といったら／～というと

B：～になると／～となれば／～となったら　など

（2）森町<u>といえば</u>、昔から木材の産地だが、最近は温泉が吹き出して話題になっている。(『日本語文型辞典』)

（3）脳死問題<u>となれば</u>、学者も安易な発言はできない。(同上)

このタイプの複合辞化したものは最も助辞化が進んだものと見られる。用法例 A、B の中の「言う」「なる」はもはや主語（動作主や変化主体）をとれなくなっている。実質語の「言う」「なる」は「(誰か)が（誰か）に（何か）と言う」、「(なにものか）が（なにものか）に／となる」といった命題を表すものであったが、機能語の「～といえば」「～となれば」などからは上記の命題を表す働きが失われ、「～といえば」や「～となれば」全体で「主題を提示する」という談話レベルの機能を表す単位に変化している。そして（2）と（3）の文はそれぞれ「森町<u>は</u>昔から木材の産地だが…」、「脳死問題<u>については</u>学者も安易な発言はできない」という文と近似した意味を表しており、「～といえば」や「～となれば」それ全体で副助詞の「は」や「については」と同様に主題を提示する機能を持つことになる。すなわち「～といえば」も「～となれば」も全体で「は」に相当する機能語と化しており、その範疇内で他の表現とパラディグマティックな関係を成立させている。たとえば、「～といえば」は「～といったら」「～というと」「～といえど」「～といっても」などと、「～となれば」は「～となると」「～となったら」「～となると」のようなものがある。

2.2　接続助詞化したもの

（4）用法例：A：～というと／～といえば／～といっても／～とはいえ

B：～と思うと／～と思ったら／～と思えば

C：～とすると／～としたら／～としても

D：～となると／～となれば／～となったら　など

（5）この議会は今までで最低だといえば問題があるかもしれない。（『日本語文型辞典』）

（6）台風が上陸するとすれば、明日の夜になるでしょう。（同上）

（7）医学部に入るとすると、一体どのくらいお金が必要なのだろう。（同上）

（8）医学部に進むとなると、相当にお金がかかるだろう。（同上）

助詞の「と」に「いえば／すれば／すると／なると…」が付いた形で前の節を受けて「それが事実だと考えれば」「実現する場合は」「このような事実、現状をふまえれば」或いは「～のような場合は」「～のような状況になった場合は」などといった意味を表す[3]。

一般的に、先述した 2.1 の提題助詞化したものと、2.2 のこの接続助詞化したものは意味的にも統語的にも、非自立語的な表現、つまり拘束的なものと見なされ得るであろう。

2.3　接続詞化したもの

（9）用法例：A：というと／といえば
B：とすると／とすれば
C：となると／となれば

例（9）の A~C の 3 つの用法とも機能的には文頭に用いて、例文（10）のように相手の言葉を受けて、詳しく展開するように促がす用法、そして（11）（12）にあるような「とすると」「となると」は推論による「結論」を導く談話標識と考えられる。いずれも前の文や相手の発言を受けて、「このような現状/事実をふまえると」という意味を表す。このタイプの A-C の 3 つの用法とも 2.1、2.2 に挙げられたものと違って、先行する文脈から導かれる結論を導入する接続詞相当の自立的な単位と見てもさしつかえはなかろう。

（10）A：この事件は終わったように見えて、実はまだ終わっていないんだ。

[3] 『日本語文型辞典』p 299、342、351 を参照。

B：というと、まだ、何か起こるんですか。

（『日本語文型辞典』からの借例）

（11）A：今年の２月の平均気温は平年より数度も高いそうですよ。

B：とすると、桜の開花も早くなるでしょうね。（同上）

（12）この時間になってもまだ帰って来ない。となると何かの事件に巻き込まれている可能性がある。（同上）

3. 連体修飾用法の「～に/となる～」[4]

（13）橋本派の幹部となる野中氏は党３役に強い影響力を発揮するだろう。（2000.2.24 読売）

（14）それだけに、イメージも重要な決め手となる公開討論では期せずして似たような服装にたどりついたのかもしれない。（同上）

（15）原因は回遊先の北洋でエサとなるプランクトンが減っているためらしい。（同上）

（16）介護保険で介護認定の根拠となる所見を書く「かかりつけ医」の比重はきわめて大きい。（同上）

（17）受賞に結び付いたプラスチックに導電性を持たせる研究の意味に早く気づいたのは共同受賞者となる米国人で白川さんの渡米によって研究は大きく花開いた。（同上）

（13）～（17）の例の「となる」には少なくとも二通りの解釈が可能である。たとえば、（13）の文を例として見る場合、「今後橋本派の幹部となる野中氏は」のように、下線部の「なる」が変化動詞「なる」であると解釈する場合、今ひとつは「現在橋本派の幹部の／である野中氏は」のように「橋本派の幹部だ／である」という属性を表す節が「野中氏」を修飾していると解釈する場合である。前者の「野中氏」は「なる」の変化作用の主体であるのに対して、後者の「野中氏」は属性の持ち主という解釈を受ける。

[4] もう一つの連体修飾用法の「～というＮ」は砂川（2006）や藤田（2000）で包括的な研究が行われているため、本研究では取り扱わないことにする。

「となる」を意味的に属性を表す「の／である」に解釈すれば前接名詞句 NP1 と後接名詞句 NP2 の関係が「NP1＝NP2」いわゆる同格関係にあるという文法的機能を果たしていることになる。こういった特徴は下の例文 18 のように前文と後文で「25 歳になる」と「25 歳の」が交互に用いられているということかも裏付けられよう。

（18）その結果、事件から二週間ばかりに N さんという 25 歳になる無職の青年が事件の容疑者として逮捕された。…逮捕されてから 30 年にしてやっと勝ち取った無罪判決である。…無罪までの長い道のりを歩んだ 25 歳の青年はそのとき、既に 55 歳になっていた。(『上級で学ぶ日本語』P 39)

以上のことから、属性を表す「なる」は「なる」という動詞の持つ実質的意味が希薄化し、「に／と」と結び付いた「に／となる」の形全体で属性を表す節とその節が修飾する名詞を結びつける機能語へと変化していると言うことができる。

（19）今度 3 年生になる娘はサークル活動を楽しんでいたが…。（2000.毎日新聞）

（19’）去年の 4 月に 3 年生になった娘はサークル活動を楽しんでいたが。

（20）わが家では 3 歳になる長男が 0 歳の時からチャイルドシートを使用している。(同上)

また、例文（19）の「なる」は「なった」が使えず、過去のテンスを表す場合には（19’）のように「なった」にしなければならない。つまり、「非過去」対「過去」の対立があるが、(20）の「なる」にそのような対立はなく、「なる」と「なった」がほとんど同じ意味を表す。

（20’）わが家では 3 歳｛になる／になった｝長男が 0 歳の時からチャイルドシートを使用していた。

（20’）の場合、「になる」と「になった」がもはやテンスの対立を表さなくなっており、動詞「なる」の持っていたテンスというカテゴリーを失っていることが分かる。

4. ムード助動詞化した用法

（21）用法例：A：～という（伝聞）
B：～とする（内容仮定）
C：～と思う（叙述態度）
D：～に/となる（推論結果）
E：～に/となります（丁寧さを表す／対人的態度）

4.1 伝聞を表す「という」

次の（22）～（25）の文における「～と言う」もやはり助動詞化した用法と見るべきものである。

（22）…旧部落の農家に新地部落の嫁を迎えることは稀だという。（『筑波山麓ムラ暮らし』ＪＩＣＣ出版局）

（23）蛟竜というのは想像上の動物でまだ竜に成り切っていない蛟のことである。人中にひそみ、雷雨に会して天にのぼるという。（『張良：劉邦を支えた名軍師』　葉治英哉著 2000）

（24）それがこの演説ではどうだ、彼が恐れたロシアではなく、よりによって彼の文化の母国ドイツがユダヤ民族の絶滅を企んで実行したという。（『ジャーナリズムと歴史認識』梶村太一郎他著 1999）

（25）イラク人の死者は民間人だけで 33 人を超えたとされる。米側の死者は 24 人を超え、英国は 100 人に達したという。（毎日新聞 06.03.18）

（22）～（24）の「～という」は助動詞の「そうだ」と同じく文中の命題内容に対して、話し手の直接体験にもとづいた判断ではなく、だれか他の人から仕入れた情報であり、いわゆる「伝聞」ということを聞き手に示す役割を果たしている。助動詞並みの機能語に変質しており、そのため動詞としての資格を失ってしまっているのである。したがって主格補語も相手格、与格補語もとれなくなる。ただ両者が伝聞の助動詞のように用いられるのはそれが平叙文の現在肯定形で使われた時だけである。この点は伝聞の「そうだ」が過去や否定や疑問の

形に出来ないのと共通した特徴と見てよかろう。

文（25）の場合の「という」には「判断する」、（23）の文の「という」は「言い伝えられる」という意味が感じ取れ、判断の主体が誰であるかは問題とされなくなっている。そのため、「言う」、「される」、また「いわれる」と言い換えてもそう大きな意味の違いは感じられなくなっている。「言う」という動詞の「発言」という意味が「判断」「伝聞」という意味に拡張されるのに伴って、もとの動詞が持っていた実質的な意味が変化するだけでなく、動詞の主体が問題とされなくなり、ヴォイスといった統語的機能にも変化が生じていることが分かる。ここでヴォイス表現との関連性についてもう少し触れておく。

伝聞を表すムード形式と化した（22）～（25）の「という」は「という」「といわれる」の能動、受身両形可能である。言うなればこうした文ではヴォイス的対立が実質的になくなっていると思われる。

またル形の「いう」「いわれる」をラレテイル形「いわれている」に直しても、本質的に意味の違いがない。すなわち、アスペクト的な対立も実質的になくなっていると思われる。ヴォイス、アスペクトといった動きの描き方にかかわる文法範疇的対立が実質的になくなっているとすれば、こうした構文の述語に立つ「いう」「いわれる」「いわれている」は動作的な意味が実質的に乏しくなって、状態性の表現となっていると考えられる。

（26）世間では「鶴は千年亀は万年」という。

なお、上例（26）のように明確な主格補語は立ちにくく、この点、動詞としての性格が希薄化しているが、場所補語がとれる点に、まだ動詞らしさが残っている。

4.2　叙述態度表現の「～と思う」

「～と思う」も上述した「という」と同様、叙述態度を表すムード形式化したものと思われる。

（27）三浦先生は本職は確か中世イギリス文学だった<u>と思う</u>が…（『筑波山麓ムラ暮らし』）

（28）一日も早く自分の夢を実現させたいと思う。（同上）

（29）この答えは正しいと思いますか。

（27）～（29）の文は引用節内の命題内容だけを取り出して次のように言い換えてもそれほど意味が大きく変わらない。

（27’）三浦先生は本職は確か中世イギリス文学だった。（同上）

（28’）一日も早く自分の夢を実現させたい。

（29’）この答えは正しいですか。

（27’）の文が話し手の判断、（28’）が願望や欲求を表明しているのである。判断、希望の表明ということなら（27）、（28）の文の場合も同じことが言える。（29）、（29’）は質問文であるが、質問のしかたとしては「～と思う」をつけた（29）の方がより婉曲的であると言えよう。つまり、（29）の文に婉曲のムードが「～と思う」をつけることによって関与しているということである。この点、（27）、（28）も、「…中世イギリス文学だった」「実現させたい」という直接的な判断と希望の表現を避けて、自分の判断、希望を控え目に表現するという配慮が働いていることが見てとれる。この「～と思う」には直接的な言い方をやわらげて、丁寧な表現にする働きを持つ。また、（30）a.の「～と思う」もしばしば「だろう」などに比されるように、いささか文末辞に近づいていると思われる。

（30）a. 明日雨が降ると思う。

（30）b. 明日雨が降るだろう。

この種の形式の表現は統語的引用とは連続的でもある。

4.3 内容仮定の「～とする」

（31）今仮に 3 億円の宝くじがあなたに当たったとします。
あなたそれで何をしますか（『日本語文型辞典』）

（32）今、東京で関東大震災と同程度の地震が起こったとしよう。
その被害は当時とは比べものにならないものになるだろう。
（同上）

（31）～（32）の「仮に…とする」は「仮に…と考える」という意

味で現実がどうであるかということは別として、とりあえず仮定、想像の上でのことがらとして条件を設定する用法と思われる。仮のものとして設定するという話し手の意識的な条件設定の意識が強いため、条件仮定の文末辞に近い。これは定型化が進んで、条件節の一種として扱われる（33)、(34）に連続している。

（33）もし 1 億円の宝くじが当たったとしたら、家を買おう。(同上)

（34）仮にあなたが言っていることが本当だとしたら、彼は私に嘘をついていることになる。(同上)

4.4　推論結果や対人的態度を表す「なる」

変化動詞「なる」の基本義は「ある状態からそれとは違う状態に移行する」という意味を表す。そして「X ガ Y（名詞）ニ／トナル」形式の変化構文は、変化の主体「X」がある過程を経て、「Y ニ／ト」で表される変化後の状態に至るという基本的意味を表す。ところが主体がなんら変化の状態を呈していないにもかかわらず、やはり「X ガ Y ニ／トナル」形式の構文をとっている次の（35）～（38）のような表現をよく目にする。これらの文は「ある状態からそれとは違う状態に移行する」という基本義から大きく逸脱して、コピュラ「X は Y である」の文に置き換えても意味が大きく変わらない。これは、実質語がモダリティ的用法に転換したものと思われる。

（35）往復航空機とも経由便又は乗り継ぎ便となります。(2000.1.21 読売)

（36）保証利用回数：ご利用金額にかかわらず、保証期間内一回（＝1 事故）限りとなります。---お支払いは毎月五日となります。（2000.1.21 読売）

（37）しかし、日本が 1%成長では小さい。3%成長を目指せというサマーズ長官のメッセージは実は市場が円買いを準備する布石になる。(毎日新聞 2000 CD-ROM)

（38）米国が航空の自由化を掲げて、業界が激しい闘いの時代に入ってからもう 20 年になる。(毎日新聞 2000　CD-ROM)

例（35)、(36）では発話時における話し手の心的態度の表現、つまり丁寧さを示す対人態度のモダリティが含意されていることが認められる。そして、形態的に常に丁寧体の「マス形」、しかもテンスが現在形で発話時現在を表す構文的特徴を見せている。

例文（37)、(38）ではこの「なる」が変化動詞として使われると過去形「なった」になるはずなのだが、実例は非過去形「なる」のほうが多かった。非過去形になるのはたぶんコピュラ化しているためで「布石だ」「もう 20 年だ」と同じであろう。このタイプの変化構文は（38）を例に取れば「業界が激しい闘いの時代に入ってから」今年までどれだけの時間が経過したかと考える思考過程を経た後、「20 年」という結論を得たことを表している。思考過程を経た結果としての結論が典型的な変化の過程における変化後の状態になぞらえられるものと考えてもよい。だとすれば、これは名詞述語文相当だということになる。

これは、「なる」が変化動詞から状態を表すコピュラ詞へ移行しつつあるものと位置づけられる。

5.　終わりに

以上の考察を通じて「という」「と思う」「とする」「となる」などといった同一の形式であっても、文法化の度合いに応じてさまざまな異なる文法的性質を持つことや、また同一の形式の中にも、重層的な文法化の現象が共時的に存在していることが観察できた。本研究は諸用法の内容語的な用法と機能的な用法、そして用法間の連続性及び有機的な関連性を全体的に捉えることを心がけたが、明確化されていない問題がまだ多々あると言わざるを得ない。これらの問題の解明を今後の研究に待つ。

付記

本論文は 2007 年 12 月 1～2 日　東京外国語大学主催の「台湾における日本研究・日本語教育・外国語教育」国際シンポジウムで口頭発表したものに修正加筆を加えたものである。

主な参考文献

安達太郎（2000）「「する」の文型と構文」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 7 号

大堀寿夫（2005）「日本語の文法化研究にあたってー概観と理論的課題ー」『日本語の研究』第 1 巻 3 号、日本語学会

砂川有里子（1987）「引用文の構造と機能ー引用文の三つの類型についてー」『文芸言語研究（言語篇）』13 号、筑波大学文芸言語学系

砂川有里子（2006）「「言う」を用いた複合辞ー文法化の重層性に着目してー」『複合辞研究の現在』藤田保幸他編　2006、和泉書院

蘇文郎（1997）「現代日本語の引用表現についての一考察」『東吳日語教育學報』20 期

蘇文郎（2004）「日本語変化表現に関する一考察ーテンス、アスペクト、モダリティを中心にー」『台灣日本語文學報』19 期

蘇文郎（2005）「ナル」の多義構造　『台大日本語文研究』第八期

日野資成（2001）『形式語の研究』九州大学出版会

日野資成（2003）『文法化』九州大学出版会

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』

松木正恵（2006）「複合辞研究と文法化」『複合辞研究の現在』藤田保幸他編　2006、和泉書院

三上章（1972）『現代語法序説』くろしお出版

三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化ー内容語と機能語の連続性をめぐってー」『日本語の研究』第 1 巻第 3 号、日本語学会